■ 2020.12.25　No228

脱原発情報

発行　双葉地方原発反対同盟　　責任者　石丸小四郎
970 － 8026　いわき市平童子町３－６　Ⅱ 903
TEL・FAX　0246-25-7737　携帯　090-4477-1641
E -mil：ishimaru19430106@gmail. com　ブログ「石丸日記」

何を伝えたいの？　疑問だらけの伝承館

１２月１３日、本情報編集委員を中心に、東日本大震災・原子力災害伝承館、大熊町新庁舎、東京電力廃炉資料館、特定廃棄物埋め立て情報館を見学した。(資料1)

伝承館は到着早々に「語り部口演」を聞くことになった。前半は紙芝居形式で地震発生から被災、復興に向けた「菜の花プロジェクト」の取り組みまでの語り。その後語り部の実体験が話された。しかし、何故か心に響かない。もっと本人が被災してここまで生きてきた経験を聞きたかった。他の展示物は最新の大型ディスプレイ機器で見事に表現されている。が、映し出された映像からは被災者の苦しい心まで感じられなかったのは私だけだろうか。

（資料1）５０数億円をかけた立派な伝承館だが・・・

脱原発情報は 228 号を数える。福島原発が産声をあげたころから発行している。

その長い歴史を振り返ると貧しい双葉地方の希望の光として輝く原発と、その運転とともに数多く発生した機器トラブル、被ばく事故、さらにその隠ぺいがある。原発中枢の圧力容器すら配管溶接個所のひび割れや燃料棒の切断事故など重大事故を幾度となく起こした。その修理やメンテナンス作業によって労働者・技術者が被ばく、白血病やガンで死亡したことが書かれている。この度の大災害は震災がきっかけとなったが、その予兆は原発の操業時から始まっていた。ブラックアウトを回避出来たはずのディーゼル発電機は大事故前にも故障し高台への移転が検討された事さえあった。国会でも取り上げられたのにそこまで対策していては原子力産業は成り立たないと切り捨てた。政府は我々の命より原発を選んだのだ。アメリカのスリーマイル島原発事故やチェルノブイリ原発事故の時は見直すチャンスだったが、なにも学ばなかった。この時の選挙では推進派が票を増やした。今の生活のため将来の危険を飲み込んだのだ。

（資料２）過去の誤りと看板の保存を訴え続ける大沼さん

（資料２）旧双葉町の玄関口には「原子力明るい未来のエネルギー」と書いた大きな看板があった。この看板は町が老朽化を理由に撤去し今は町の倉庫に眠っている。標語発案者の大沼さんは伝承館に展示するよう要請したのだが大き過ぎるからと断られた。伝承館の入り口にこの看板が掲示されていたらどんなにインパクトがあったろう。住民の期待と生活と破滅の歴史が詰まっているからだ。放射能に汚染され錆付き朽ち果てようとしている看板だ！家だ！街並みだ！避難バスで人間の尊厳も看取りもなく死んでいった犠牲者だ。伝承館の違和感・・・地獄の底に落とされた悲しみもない、怒り、憎しみもない、反省もない。伝承館は未来に何を伝えるのだろう。　（斉藤）

徹底的に見捨てられた初期被ばく
～新しいステージに入ったか小児甲状腺がん～

12 月 12 日の朝日新聞に、県民健康調査検討委員会長星北斗座長は「甲状腺がんの放射線影響は証拠ない」「検査のあり方実態を見つめ議論」と書いてあった。**早い話が「学校検査をやめるべき！」という事だ。**

その２日前、福島県議会の一般質問で、小児甲状腺検査の見直しを質した県議会議員（紺野長人県民連合・社民）がいた。 その内容は「学校単位検査は強制的」「数ミリにも満たないがんを検出し手術をしている」「検査により負担を強いている」と星座長と重なる問題を質している。

この笑顔の陰に何が・・・広がる福島県への不信と疑惑！

10月3日、東電福島第一原発の過酷事故を受けた「県民健康管理調査」検討委員会（注）の開催に先立ち、福島県が事前に委員を集め秘密の準備会を開き、調査結果に対する見解のすり合わせや「ガン発生と原発事故に因果関係はない」を共通認識とした上で、準備会の存在を外部に漏らさぬよう口止めをしていたことなどが判明した。一連の疑惑を追ってみた。

県が秘密会に深く関与し議論誘導

18歳以下1人甲状腺がん
福医大、放射線の影響否定

甲状腺がんの発生を伝える新聞

事の顛末はこうだ。
・子どもたちの甲状腺検査で原発周辺13市町村38,114人のうち、一定以上の大きさのしこりが見つかった2次検査対象者186人の中の1人から甲状腺ガンが初めて確認され県民に大きな不安は広がった。
・9月開催の第8回検討委員会の直前に県庁内で秘密の準備会を開催していた。
・検討委員会は即座に「原発事故とガンの発生の因果関係があるとは思われない」と因果関係を否定。
・福島県が運営の誘導と意見調整に深く関わり、質疑応答の"シナリオ"まで作っていたことが判明。
・県は総務部長を委員長とする内部調査委員会を発足させ10月5～8日まで聞き取り調査を

（注）「県民健康管理調査」検討委員会
東電福島第一原発事故による県内の放射能汚染を受け福島県が、県民の健康不安の解消や将来にわたる健康管理の推進等をはかることを目的として実施する「県民健康管理調査」に関し、専門的見地から助言を得るために設置されたもの。座長は山下俊一・福島県医大副学長、委員は１０人・オブザーバー９人の１９人で構成されている。これまで計８回開催されている。

プルサーマル受け入れ３条件を放棄する

ヨウ素データが入手できないと語る山下福大副学長

実施し「事前の意見調整や誘導の事実は認められなかった」と発表。
・検討委員会前、準備会の秘密開催や「進行表」が6回分作成され、2回の進行表で誘導疑惑の記述があったことは「県民に疑惑を抱かせかねない行為があった」と運営の見直し方針を示す。
・佐藤雄平知事は10月10日の県議会で「疑念を抱かせかねない行為があったことは県民の皆さんに大変申し訳なく思う」と陳謝。今後、検討委員会に外部委員を追加して客観性を高め定期的に開催するなどの改善策を表明した。
以上のように福島県は問題の幕引きに懸命であるが、現状が改善されるのか県民の中に疑問が広がっている。
とにかく佐藤雄平知事就任以降の福島県の原発に対する基本姿勢は推進一辺倒に転じ、事故後は県民のいのちを守るよりも「事故の過小評価」「がん発生と原発との因果関係の否定」「情報とデータの秘匿」だけが目立っている。
それを列記するとこうなる。
１．プルサーマル受け入れ３条件の一つである「耐震安全性」問題で津波対策の必要性を資源エネ庁担当課長から打診されたが、それを求めなかった。

オフサイトセンター撤退で住民避難機能せず

残っていたＳＰＥＥＤＩデータ

県は津波対策を国や東電に迫る絶好の機会を自ら逃し県民に痛烈な打撃を与えた。
２．原発事故後、緊急事態応急対策拠点施設（オフサイトセンター）を６０㌔離れた福島県庁に撤退させ住民の安全確保ができない状態に至らしめた。
原子力災害対策特別措置法において指定された同施設は国や地方自治体の対策本部が「原子力災害合同対策協議会」を組織し住民避難や事故収束の措置など協議しなければならなかったが、ほとんど機能しなかった。
３．緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム（ＳＰＥＥＤＩ）のデータを消失させ県民に無用な被曝をもたらした。
（財）原子力安全技術センターから受信したメール８６通のうち６５通を消失させた上、国と県の指揮系統の確保ができず浪江町民をはじめとする多くの住民を被曝させた。
４．弘前大学が2011年４月、福島県からの避難者を対象に甲状腺検査を行い継続検査を考

ＳＰＥＥＤＩデータを消失させ無用な被曝

高い放射線量が計測された津島地区を歩く避難住民

えていたところ福島県が「不安をかき立てるのでやめてほしい」と要請していたことが判明。
初期段階の甲状腺被曝実測データはほとんど残されていない。
５．保・幼・小・中学校の屋外活動制限暫定基準年２０㍉シーベルトと設定した時「要請は地元」と一部マスコミが報道。その後「要請は佐藤知事」とメディアで報道された。
６．福島医大副学長で日本甲状腺学会理事長の山下俊一氏は全国の専門医へ「福島県からの避難者の検査は控えるように」の主旨の通達を出したとメディアで報道された。
７．２０１１年３月１４日、１号機に続き３号機が水素爆発した直後の午後１時２０分頃、東電福島事務所から同本店へ「これから天候が崩れる予想だが今、北西の風が吹いており、観測された放射線量から健康被害が出る心配はないと次回プレス文に入れてほしいと福島県知事から要請があった」の経過が記録映像に残されていたことが判明。
原発震災から１年７ヶ月経った今も福島県の不祥事や不手際が浮上し県民の不安と怒りが広がっている。

出典・2012.9.12 福島民友・NHK：ＥＴＶ特集「埋もれた初期被曝を追え」

- 2 -

（資料３）　　「福島県に対する不信と疑惑！」を伝えている既報Ｎｏ147

これを見て「小児甲状腺がん問題は新たなステージに入ったな！」と思った。「新たな！」とは、様々な角度から甲状腺がん検査を止める発言をすることで「放射線障害の証拠がない」として、全ての問題に“幕引きを図ろうとする思惑”があるように思える。 2006 年 11 月から今日まで佐藤雄平知事、内堀雅雄知事になって福島県の原発に対する基本姿勢は“原発問題は我関せずのおもむき”で「初期被ばくの隠ぺい秘匿」「小児甲状腺がん発生の因果関係の否定」だけが際立っている。

（資料３）は、それを取り上げた既報 No147（2012.10.28）である。タイトルには「この笑顔の影に何が…広がる県への不信と疑惑！」とある。

左端の新聞記事には 2012 年９月、原発周辺 13 市町村の幼児 38,114 人の内、一定以上のしこりが見つかった２次検査対象者 186 人の中の１人から、甲状腺がんが見つかり、県民に大きな不安が広がったとある。

ところが９月末開催、第８回検討委員会の直前に県庁内で秘密の準備会を開催し、早々と「原発事故とがんとの因果関係はない」と因果関係を否定するシナリオまで作っていたことが判明した。

佐藤雄平知事は 10 月 10 日の県議会で、「疑念を抱かせかねない行為があったことは県民の皆さんに申し訳なかった」として運営の見直しに言及した。

そして今後、検討委員会に外部委員を追加して客観性を高め、定期的に開催するという方針を示している。

小児甲状腺がんの発生から８年…「悪性疑い」と診断された子どもは、**今年３月まで 246 人**にもなっている。

通常、小児甲状腺がんは 100 万人に１～２人程度とされるが、すでに 200 人が手術を受け（内 1 人が良性）甲状腺がんと確定している。しかもこの人数が全てではない！！２次検査で経過観察となり、保険診療に移行した人は、その後、甲状腺がんと診断されても公表データには含まれない。

（資料４）は郡山市を拠点に活動している小児

甲状腺がん患者と家族、支援者による支援組織「あじさいの会」のパンフレットである。

（資料４）あじさいの会
パンフレット

そのメンバーは、昨年６月から３回にわたって、福島県知事宛に「県民健康調査検討委員会および甲状腺検査評価部会の公正な委員選出と運営に関する要望書」を提出している。**（資料５）**

特に、検査のあり方や医療費助成の拡充を求めている。写真は県民健康調査課と面談した時のもので、その内の１回は患者本人が自ら県交渉に参加し発言している。

（資料５）2019 年９月、あじさい会ﾒﾝﾊﾞｰﾊは
「県民健康調査」検討委員会に要望書を提出

「私は検査で早く見つけてもらったから、今こうしていられるのです。見つかった時には、すでに神経に隣接していて、しかも、検査のたびに腫瘍は大きくなってきていました。子どもたちのためにも検査を続けるべきです」自分の経験に基づいて淡々と語りかけると、県職員のうち２人は、身体を固くしながら真剣に話を聞いていた。患者の声を聞くのは始めてだという。

しかし、最も高い位置にある課長は、いつもと変わらぬ態度で県の立場を一方的に説明するばかりだった。

彼女は、この態度に我慢できなかったのだろう。「待ってください！私たちの話を聞いてください」課長の言葉を遮り、こう語り出した。

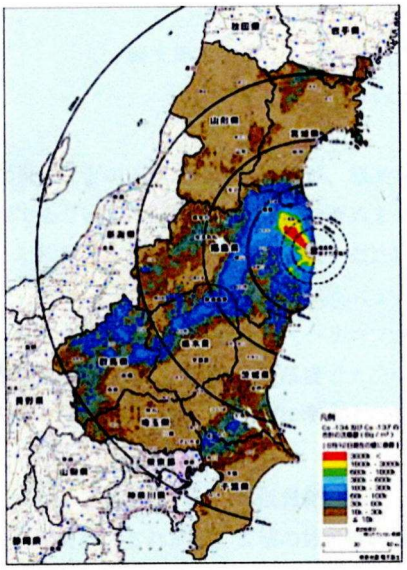
「何としても、甲状腺がんの原因が何だったのか…なぜ私が甲状腺がんになったのか知りたいのです。甲状腺検査は国策として進めてきた原発事故があったから検査をはじめたんでしょ！だからキチンと検査して、結果を公表する責任が国と県にあるのではないですか！」と訴えたという。(注１)

（資料６）地域別に見た本格検査の悪性、悪性疑い発見率

（資料６）を見て欲しい。「地域別に見た本格検査の悪性と悪性疑いの発見率」である。

「避難区域 13 市町村 **10 万人に 53.1 人**」「中通り **10 万人に 27.7 人**」「浜通り **10 万人に 21.6 人**」「会津地方 **10 万人に 14.4 人**」である。

これを（資料７）の放射能の流れに重ねて欲しい「避難区域 13 市町村」と「中通り」「浜通り」「会津地方」に流れている。



（資料７）2011年３月東日本汚染地図

彼らはこれを見ても「地域的隔たりはない」と言うのか？

これほど多くの小児甲状腺がんが発生するのには、その原因があるからである。

それは言うまでもなく 2011 年３月 11 日から始まる福島第一原発過酷事故である。

チェルノブイリ原発事故では小児甲状腺がんが多発し、驚きをもって受け止められていた。(注２)

この問題はほとんど…全ての人が知っていた。

特に、原発所在県では**ひとたび**事故が起これば**放射性ヨウ素 131 が膨大に放出され、甲状腺は「放射性ヨウ素」をヨウ素として吸収してしまい、甲状腺がんに罹患する原因となる。**しかもヨウ素 131 は、半減期が 8 日と短いから「安定ヨウ素剤の服用」「甲状腺スクリーニング検査」(注３)の対応は喫緊の課題として考えられていた。

その証拠が右上の「福島県立医科大学議事録要旨」である。

福島県立医科大学議事録要旨	
３月 16 日 午前９時	製剤を全県民に配るのは不可能…（略）配布に当たって、年齢制限をかけるべき。**40 歳以下へ、20 歳未満は絶対に服用するように。**（略）
３月 18 日 午後６時	（山下俊一氏、福島県立医科大学で「今回の災害における子ども母親の安全・安心のため」と題した講演会を実施する）
３月 19 日 午前９時	看護部以外の所属職員、子どもに対するヨードの配布を会議終了後、所属に配布。使い方も添えて添付。飲むタイミングは本部が指示する。
３月 20 日 午前９時	長崎大学山下俊一教授、高村昇教授が昨日、県の幹部と意見交換を行いリスクアドバイザーとして依頼、市民に向け心配ない旨、話をしてもらう。

（色、下線、ゴジックは編集部）

（資料８） 当時、発行された週刊誌フライデーに「医師たちの偽りの安全宣言」が掲載

ジャーナリスト(注４)が情報公開によって得たもので３月 16 日から 20 日までの出来事が記されている。

16 日には「20 歳未満は絶対に服用するように…」と**絶対を付けて書かれている。**

この段階までは県民の健康・命を守る意思として急ピッチで対策準備が進められていたことがわかる。ところが 18 日に、山下俊一氏が講演をした後ではガラリと様子が変わってくる。19 日には**看護部以外**の所属職員にはヨードの配布を事細かに指示している。

これは（資料８）に「安定ヨウ素剤を飲んでいた医師たちの偽りの『安全宣言』」に掲載され大きな反響を呼んだのだ。

何故「看護部以外」に配布したのか？は、今後の課題となろう。

20 日には原子力災害伝承館の館長に就任した高村昇教授も加わり県幹部と意見交換を行い「市民向けに心配ない旨、話してもらう」となった。そして「県の幹部と意見交換を行いリスクアドバイザーに依頼した」とも書かれている。その後県内各地で両氏の講演会が行われ**放射能問題は心の問題にすり替えられた。**

（資料９） ３月、いわき市平で数珠つなぎになり水を汲む市民の姿が…

（資料９）では、いわきの市民が水を求め屋外で並ぶ姿が見られた。これはいわき市ばかりではない…これ以降、初期被曝は徹底的に見捨てられ葬られたことを付け加えねばならない。（以下次号）

東電交渉　再開５７回目

再三再四にわたり海洋投棄 止めよと要求！

再開後 57 回の東電交渉は 21 日、いわき市で開催され再三再四にわたり海洋投棄に反対するよう東電側に求めた。その経過を伝える。

【前回（2020.11.4）積み残し事項】

１．第一原発事故のトリチウム等タンク汚染水の海洋放出は実施しないこと。

①丁寧なプロセス、適切な対応とは具体的に何か？

②情報誌「はいろみち」の化学分析室業務に使っている防護服を示して欲しい。

③「炭素 14」について、規制庁議事録(第 72 回・同 79 回特定原子力施設監視・評価検討会）の不整合について

２．トリチウム等タンク貯蔵汚染水の処分について市民説明会を実施すること。

①　丁寧なプロセスを踏みながら適切に対応するという内容は何か？

３．トリチウムの分離技術の開発実用化、タンク貯蔵汚染水の大型タンク保管やモルタル固化保管など陸上保管など更なる検討を行うこと。

①近畿大学の 2019 年、分離技術の進捗状況について、東電の把握は？

②フランジタンク解体後タンク敷地はどのくらい可能か？

③二次処理の際、有機トリチウムは除去出来るのか？

４．その他の未回答項目について。

①米と黒毛和牛の賠償について。

②第一原発建屋滞留水を含めたトリチウム総量 2,069 兆ﾍﾞｸﾚﾙのｼﾐｭﾚｰｼｮﾝは？

③汚染水の貯蔵管理及び処理費用は？

④第一原発作業員の外部被曝、月別集団線量。年によって変動を明らかにすること。

⑤Ｊヴレッジの原状回復工事の結果を報告すること。

※２時間の交渉なので紙面の都合で割愛する。

１．①について

（東電）当社としては廃炉・汚染水対策を安全かつ着実に進めて行くにあたり、リスク低減に向けた安全対策の取り組みや、作業状況について地元を始め関係者にしっかりと伝えて行きたい。情報を正確に伝え、風評低減、流通促進のため努めて行く所存である。

（諸団体）具体的な対策がゼロではないか！

②について

（諸団体）掲載されている防護服の写真は様々にある。それをキチンと伝えて欲しい。

③について

（東電）「炭素 14」は 62 種類の核種に入っていない。結果取り除くことは出来ない。

（諸団体）識者の中には「これはペテン以外の何物でもない。福島の核災害は核公害問題であり、足尾鉱毒事件以降、日本において無数に生じてきた公害事件と照合すると典型的な悪質公害物質排出未遂事件と言ってよい」と主張する人物もいる。

（東電）しかし、告示濃度以下である。

２．①について

（東電）そう言う声を頂いたことを伝えたい。

３．　③について

（東電）有機物を除去することは可能である。一方、トリチウムが有機化する場合においても生物は通常の水素原子とトリチウム原子と区別することは出来ないので、周辺環境の同位体域で有機化するため、そのような方法で除去したとしても、ほんの一部に止まるため問題の解決にはならない。　（以下割愛）

滋賀県に自主避難９年目
青田さん 自作の布絵と詩に込められた思いを…！

ライゾウ

ライよ　許しておくれ
おまえと引き裂かれたのは
まぎれもなく原発のせいだ
一緒に連れて逃げられなかった
おまえだけをふるさとに残して
八百キロメートルの逃避行をした
戻らぬ主を待ち焦がれたか
迎えに来ない主を恨んだか
十五年間番犬として君臨してきたライよ
おまえもりっぱな原発犠牲者だ

ライよ
段ボール箱に入って
危うく保健所に連れていかれる所を
我家にやって来た
うす汚れて二枚目ではないが
市川雷蔵ファンとしては
ライゾウという名をつけて
日に何度も「ライ様」と呼ばせて頂いた
力ばかりやたら強く犬小屋をひっくり返す
ブロック三個を重石にしてもひっくり返す
買ったばかりの犬小屋を
翌日にはバラバラに分解する
獣医師の前では
とたんにお利口にじっとしている

「いい犬ですねえ、セラピー犬になりましたよ」
と　いつもお褒めの言葉を頂いた
「先生　どこがいいのですか？」
「最近めったに見られない犬らしい犬なんですよ」
「犬らしい犬…ですか」
そう言えば巷ではおもちゃの様に小型で
可愛い服を着た犬が目立つ
腰高で牛蒡の様なしっぽで
耳がロバの様に大きくて　どこかアンバランスだが
先生はこの犬を『歴代の雑種』とほめたたえた

ライよ　許しておくれ
雨のように降って来る瓦の下で
首輪をはずすことができず
共に恐怖に震え耐え抜いた
ライよ
おまえの形見はたったひとつ
飛びついた時　着物の裾に作った
二センチばかりのかぎ裂き
「コラッ！大事な着物を」って叱ったけれど
おまえが残したたったひとつの痕跡
まなぐから熱いものが溢れ
枕を濡らす

※【まなぐ＝まなこ・眼】

国、東電、原子力ムラに聞こえるや　関連死三千の無念の叫び　惠子

布絵　　森の匂いは消えていった　より

編集後記

今回　改めて過酷事故から始まる「初期被ばく」問題を考えてみた。
そこには、福島県の健康と命をつかさどる　はずの福島県医科大学の姿が浮かび上がってきた。長崎大学の山下俊一・高村昇両教授がいとも簡単に同大学を牛耳る姿に愕然とする。そこには「県民の健康　命をどう考えているのか？」の思いがつのる！　「それはおかしい！こうあるべきだ！」と疑義を主張する人物はいないのだろうか？　いたいけな子どもたち、思春期の子どもたちを思う時　胸がかきむしられる。
彼らの声を聞き　考えているとは　とっても思えない「放射線影響の証拠がない」など良くも言えたものである。
「検診を止めるべき」と主張した県議は同じように　親御さんや子どもたち、教師の声を聞いたとはとても思えない…。
今年は、コロナ禍のなか、足止め口止めされ　思うような活動ができない年でした。来年は、原発事故から10年目　心して頑張りたいと思います。　（石れ　）

出典　文献
・（資料１）伝承館 HP・（資料２）大沼勇治氏・（資料 3）脱原発情報Ｎｏ 147・（資料 4 ～ 6）OurPanet-TV2020.12.10（資料 7）文部科学省・（資料 8）週刊誌フライデー 2014.3.7・（資料 9）いわき市・伝承館写真集
・（注１）OurPanet-TV2020.12（offlineonline）（注２）原子放射線の影響に関する国連科学委員会（UNSCEAR）2008 報告書・（注３）喉の近くにサーベイメータやスペクトロメータなどの線量計をあて甲状腺に集積したヨウ素 131 を検査する。子どもへの負担なし・（注４）「浮かびあがる 3.11 後の安定ヨウ素剤を巡る対応と県民健康調査の出発点」麻田麻衣氏・科学 Jul2020vol190